

資料-1

木曽三川ふれあいセミナー 現地見学会

木曽川上流河川事務所

平成21年5月31日



かさだ広場で見られる主な外来種および在来種

《外来種》

オオキンケイギク



シナダレスズメガヤ



オオフトラムグラ



《在来種》

カワラサイコ



カワラヨモギ



カワラナデシコ



キバナカワラマツバ



1

かさだ広場にみられる 在来種

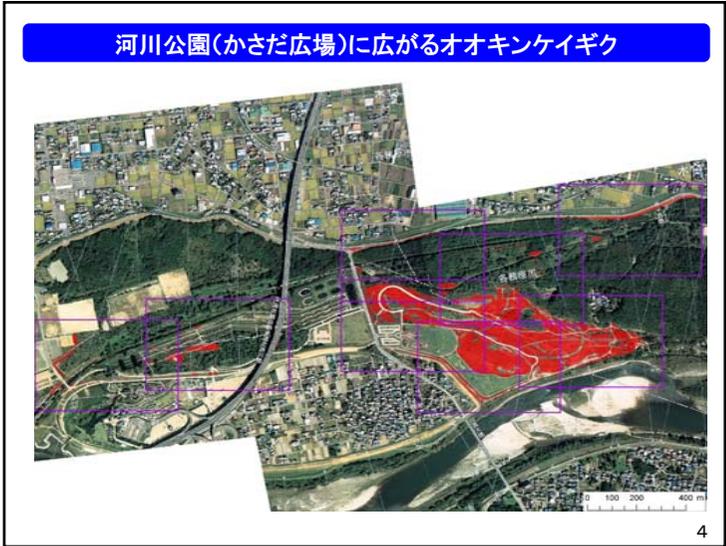
	<p>和名: カワラサイコ 学名: <i>Potentilla chinensis</i> Sieb.</p> <p>特徴 バラ科の多年草。高さ20～40センチメートル。まれに70センチメートルになるものもある。全体に長毛がある。根は太く、大きい。葉は羽状複葉。小葉は深く羽状に切れ込み、裏面に白色の絨毛が密生する。6～7月、葉の先端に直径約2センチメートルの黄色の花を多数咲かす。葉は晩夏(そうか)、本州、四国、九州の山沿りの山原や海岸の砂地に生え、まれに内野や山地にもみられる。中国、朝鮮にも分布する。茎は、植物体が中心部のサイロ部に似ており、河原に生えることによるという。中国では全草を薬(しょうやく)として使用する。本州に広がるが、小葉間に小葉片葉がなく、小葉も数少なく、大きく広いセロノカワラサイコP. nipponica Th. Wolfは本州と北海道に分布する。</p>
	<p>和名: カワラヨモギ 学名: <i>Artemisia capillaris</i> Thunb.</p> <p>特徴 キク科の多年草であるが、茎下部が木質化して亜低木となる。花をつけない茎は短く、上部に葉を叢生(そうせい)してロゼット状となる。花をつける茎は高さ30～2メートル、よく分枝する。いずれの葉も、3羽羽状に全裂する。裏面に灰白色の絨毛が密生するものから無毛に近いものまである。8～10月、大きな円筒(えんすい)状の多数の花を中層につける。本州から沖縄の海岸や河原の砂地に生え、朝鮮半島、フィリピン、中国からネパールに分布する。</p>
	<p>和名: カワラナデシコ 学名: <i>Dianthus superbus</i> L. subsp. <i>longicalycinus</i> (Maxon) Kitam.</p> <p>特徴 ナデシコ科の多年草。茎は直立、株立ちとなり高さ約50センチメートル。葉は広線形で長さ約5センチメートル。苞葉は3対。秋に葉の裏には、3葉をつけ、花弁は緑色で先は細かく切れ込む。山地の草原や河原に生え、本州、四国、九州に分布する。かつての産地のキバナカワラマツバ(種子)とよんどの対し、本種をヤマトナデシコ(大和種子)とよんだが、その産地から意味を転じ、日本特有の女性のことと大和種子というようになったといわれる。基本種は3対の苞葉をもつオオカワナデシコで、中部地方以北の本州、北海道からシベリア、ヨーロッパに分布する。本州の高山には丈の短い変種のカワナデシコが生息する。</p>
	<p>和名: カワラマツバ 学名: <i>Galium verum</i> L. var. <i>asaotsumi</i> Nakai f. <i>nikkoense</i> (Nakai) Ohwi</p> <p>特徴 アカネ科の多年草。茎は高さ60～80センチメートル。葉は線形、長3～4センチメートル。そのほかの葉が輪生するが、葉の裏は特に、他は花葉(たけ)が分裂し葉状となったもの。花は白く、裏に黒く、両面に緑生し、日本と朝鮮に分布する。名は、河原に多く、葉が紅葉に似ることによる。花が黄色い品種をキバナカワラマツバ、淡黄色の品種をエソノカワラマツバという。</p>

2

かさだ広場にみられる 特定外来生物(植物)等

	<p>和名: オオキンケイギク 学名: <i>Coleoptis lanceolata</i></p> <p>原産地 北アメリカ(ミシガン～フロリダ、ニューメキシコ)原産である</p> <p>特徴 キク科の多年生草本で、葉は長さ20.3～0.7m程度である。道南に分布する。除害: 河川沿、緑地帯、海岸などに生息する。開花期は6～7月、頭状花、虫媒花、複果をつける。定着実績: 1950年代観賞用、緑化用に導入。全国的に逸出している。その他: 八重咲きの緑生種が人気、鉢植えや花壇に利用されている。緑化で産地のクワウツク(クワ)が減少し、花結実が減少しないなどの理由で、ワイルドフラワー緑化で最も使われたものの一つである。道南の法面緑化等に近年大量に使用されるようになった。緑化用のホトメとして生産・流通があった。増えすぎを防ぐためには、晩雨時に刈払いを行い、結実を防ぐことが必要である。河川の土手等に黄色い花を一目に認めることから、地域の住民に観察、まわっている機会がある。</p>
	<p>和名: シナダレスズメガヤ 学名: <i>Eragrostis curvula</i> Nees</p> <p>特徴 イネ科の多年草。シナダレカサ、シナダレスズメガヤともいう。高さ0.6～1.2メートル。葉は20～31センチメートルの穂が出て、まばらに分枝する。葉は糸のように細長く、幅約2ミリメートル。長さ約51センチメートル。全体がしなやかに垂れ下がりが美しく、生長は早い。また、強く根を張って暑さや日照り、乾燥に強く、やせ地にも強いので、道路の法面(のりめん)や造成地の斜面などに土砂の流出防止のために植え入る。産地は豪雨の原料とする。原産地は南アフリカで、日本には昭和20年代に導入された。最近では野生化し、道南や奥州、土手などに広みられる。</p>
	<p>和名: オオフトラムグラ 学名: <i>Dioda teres</i></p> <p>特徴 オオフトラムグラは北アメリカ原産の緑化植物。海岸や河川の砂浜に生息する。葉は斜めに立ち上がり、葉は無毛で、裏面に硬くて短い毛があり、葉の縁は緑色の帯毛があつてざらつく。花は葉腋につき、7月から8月にかけて白から淡紅色である。花冠は4裂し、雄しべ4本。</p>

3



オオキンケイギク 分類: 合弁花類、キク科、ハルシヤギク属

いつ頃から日本で見られたか

- 原産地・国内への進入**
オオキンケイギクは、北アメリカ原産の多年性草本で、観賞用、緑化用として進出。1880年代に導入されたものが、野外に定着し、日本各地で見られるようになった。
- 形態的特徴**
開花期は5-7月。頭状花は直径5-7cm。舌状花は黄白色で、花冠の先は不同に4-5裂する。筒状花も同じ色で花床に細い鱗片がある。総苞片は2列につく。
- 茎葉**
茎は、高さ30-70cmで、東生する。茎葉は対生または時に一部互生し、狭倒披針形。根生葉は花時にも残り、長い柄があり、3-5小葉に分裂する。両面とも短い毛がある。

オオキンケイギク

自然環境への影響

- 自然環境への影響**
国内では河川の礫河原に侵入することから、在来の礫河原植物への影響が懸念される。
海外ではオーストラリアや南アフリカで在来種への影響が問題になっている。
- 在来種との競合や駆逐**
ワイルドフラワー緑化等に広く利用され、各地の河川等で繁茂して、河川敷固有の植物等の在来種との競合や駆逐のおそれがある。

オオキンケイギク カワラヨモギ
(礫河原在来種)

5

オオキンケイギクの生態

1. 繁殖(広がり方)

- ・多年草で根茎から再生する
⇒刈り取るだけでは再生を続け、大きな株になっていく
- ・種子でも繁殖しやすい
⇒分布拡大を防ぐにはタネが散布される前の刈り取りが必要
- ・土壌中の種子の寿命
⇒小さいもので2年、大きい種子で13年
- ・発芽に適した環境であればすぐに発芽

2. 生活史

多年生草本植物
かさだ広場(河川公園)では、5月末から6月初旬に満開

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
					▲						
					●						
					■						

結実防止には、春期の結実前の除草が効果的か？

6

オオキンケイギク植生管理実験 防除の技術開発へ

特定外来生物(植物)検討委員会

国土技術政策総合研究所では、その防除法の開発の一環として調査を実施しているところである。本調査においては、かさだ広場等を試験フィールドとした植生管理実験を通じて、オオキンケイギクの防除法とその効果の検証を行い、防除による在来河原植物の再生効果を明らかにするものである。

本委員会は、外来植物、植生管理などに詳しい有識者より、オオキンケイギクの効果的な管理方法について助言をいただき、これらの防除法をとりまとめることを目的とする。

- ◆主な委員
岐阜県立国際園芸アカデミー教授 藤原宣夫(委員長)
信州大学 農学部 森林科学科 准教授 大窪久美子
(総)農業環境技術研究所 上席研究員 藤井義晴
(総)土木研究所 自然共生研究センター 主任研究員 皆川朋子
環境省 中部地方環境事務所 野生物理課長 水野拓郎
国土交通省 中部地方整備局 公園調整官 黒澤伸行
国土交通省 木曽川上流河川事務所長 高野匡裕
- ◆事務局
国土交通省 国土技術政策総合研究所 緑化生態研究室

平成19年5月25日 中日新聞

7

